



徳川實紀資料

七

特別
45
3072
5

共十二



リ印5
稀 3.072
巻 57

享保六年



一 尚月十日日暮時石河内江古殿小洲奉
書系明十日日暮時 田城へ書系奉
來以江信紙面調を以て候之時分遊符
奉之江方の宅迄系以て奉要ゆき上
等之江夜中至江古殿宅迄系以て用
人とし明日は時とて少候所候事あり候
一 此の衣服は後紗麻上下なるに云々一
一 一 推帝以る慶斗目候事又指系一

中多四一後也

一 翌十日日入つ時、誠、亦不不平之所、版、
及所去肥、凍、解、修、其、其、以、人、樹、於、後、
田、同、为、と、以、を、以、も、及、田、業、内、中、以、田、郷、
の、以、に、人、と、も、は、た、な、り、る、つ、と、ち、り、る、ま、
な、田、中、後、る、以、後、に、つ、時、より、八、時、を、お、待、
ひ、と、日、の、ま、風、は、く、ま、を、別、を、後、難、儀、
を、以、も、及、田、業、と、以、附、ら、る、田、産、亦、以、東、に、
在、り、也、と、以、の、事、以、して、田、神、理、を、田、内、

わーら下ゆーい少を幸と後、の、遊、竹、奥、

糸山、棟、よ、の、の、以、て、と、け、い、の、者、よ、と、以、後、
以、田、例、を、以、田、肥、亦、亦、及、の、
是、以、田、例、を、以、田、肥、亦、亦、及、の、
田、業、亦、以、田、業、亦、以、 同、乃、ら、後、丈、亦、東、以、

同、竹、房、も、亦、以、り、中、後、亦、亦、成、以、を、以、も、及、田、
近、ら、る、丈、亦、亦、以、も、及、田、連、ら、る、席、下、借、或、
も、

糸、り、中、以、田、業、男、の、以、
以、亦、亦、在、田、内、も、亦、以、も、及、田、亦、以、
亦、以、亦、以、亦、以、亦、以、亦、以、亦、以、亦、以、

一、二、章、海、一、
一、二、章、海、一、
一、二、章、海、一、
一、二、章、海、一、

と四一の附口人よに返おは次の田極頼まてお
おは旭平平之節おあつものりしてるゝ忠度
あは田見養は満清のりあはて平之節お陰は
とよは溝よして返おこつては之後はつもの
よ衣もせよは初田次おあおまは後と田札上
は後四月昔井上河内お後田一人は田札系一統着
年お元之人はお残系一統なる田中一人は中
一人は在はる後つるお在はる後つものおまをたお四人
は元之の中は只忠通なる是は後頼成は田例元之入

とを在はる後つるお在はる田札中一人は
一人は只お田中成忠なるはは後河と溝一統
とせよはとよは老史養は後つるおあの中は潤子系
よは後不取役男はあを中一とよは残は常置院
極田代は毎度及四度男へおも溝叙してつた
中は看久洲原は神は文昭院極田代毎月田産
男はて溝叙して一乗はは色業月なるおを史
子は不業月お後の子にして定る不潤法なるは
と後叙は去とも先大方には世は男田公易ら息は

一 下は少潤子中なるをよみて長し薄し中義は成
りしよくてもくはむはむに書る初に安学故只をく
所ゆる 上はと沙退在すく初るよとの心
をくくもよては阿字も回りと書ぬ

一 聖十八日日本御田舎友へ其紙仍も本居書友と
して右に田札 宰相極と田序に極と下は極
もくく重んじたる又後田内蔵と物及田もと
たし 宰相極紙面は潤しとゆくよくく
をまじり何ぞ存くとも 信句子細く

くもくくく 存ゆゆ けは 陽のひと透し
をまじり田家出くく 宰相極と田序
ら極ゆく 田札もくく 極と 宰相極と田序
くく 田札もくく 田序もくく 宰相極と田序
宰相極と田序もくく 田札もくく 田序もくく 宰相極と田序
舎人友とく 紙面潤をくく 田札もくく 田序もくく
田札もくく 田序もくく 田札もくく 田序もくく
且又紙面は私お意の字文はくく 田札もくく
とくく 田札もくく 田序もくく 田札もくく 田序もくく

多しよ此後、鄙まゝ謝辞、田舎落らね
續撰成、田舎頂戴是仕、又頼もるは、田舎
老吏より田舎、公を、下、田舎、田舎、
田舎、田舎、紙、上、中、少、此、見、頼、仕、
少、有、田舎、各、秋、田、後、火、中、成、下、田、

二月十八日 定新助

奥村源兵衛様 吉沢善人様 同友彦様
小寺玄斎様 成田宇高様 伊木兵庫様
福垣子之丞様 大比呂高八様 同新八様

亡友小菅伴高様存書、
信海の義お侍中、
又相遊儀存書、
此、

一 扱、
具、
別紙、
只今、
今、

此是文及之候も恒々其成跡を成すに新井
氏との中も成跡を何とていふに止む可
く世帯にも儒學流は引く引くは成
新思に成 伊東 伊東 伊東 伊東
講釈ら 伊東に成 伊東に成 伊東に成
成 成 成 成 成 成 成 成 成 成
成 成 成 成 成 成 成 成 成 成
成 成 成 成 成 成 成 成 成 成
成 成 成 成 成 成 成 成 成 成

正月十八日

晋代藏人候

大二十

一
修る不系譜安積氏に在中より新書より
定山尚書より書状の束又甲越山に不系
譜より後改製誤り成文辭記より未結

表紙残すお見えの中へ何となくとてその表紙に
類同の子件一夏よりお知は候よりいふ一夏
存の意より疑考おはる之月中とて是り
一夏は夏とてに考おははる法合とて
随分考へる中紙のすて通書は人目を
比ふ考へるより少なりき不中はる当秋中
とて考へ候へる紙のあらうと疎畧に
辨はる何と一夏年成ともお知は候は
友の申すに未譜に結句お知へる事とて

くは存候は候へる事実の久しとてはる紙
お知は候へる頃日漸くはるに日本の
古社等の文書とてはる集一とてはる文書纂
とてお大なるはるはる且又流泉の系譜方へ
はるつめはるはる系譜纂とてお是又大
はるはるはる中一夏はるはるはるはるはる
山雲平とてはるはるはるはるはるはるはる
はるはるはるはるはるはるはるはるはるはる
と披索はるはるはるはるはるはるはるはるはる

りとも多くありし中物之部いしくは宗義
在成只今いふは雲平一人のこり中いふは
老人より及昔より夜よりいふる及くとも今も
系留木ののりいけ志持明りり度い有るま
實成志より中取中いふ志うはは友のりい
天下一人と存い志雲平法皇巡行の時
越好極きし時一宿りいふ山風呂入
いふいふは早聲丈夫大聲といふ成
と物と形より不形成いふとお供なすの時い

昭後乃婦と存い安積い中挨拶の趣もきて
書状をいふ時いりて連いりて久よりをい
田圃同同なる被能字い別いを依をいりて
外に新い條子書と潤添るをいりて是より水
風ありいり及事信殺多といふ尺原りり有
いりり及事いり信中一節文いりりいり
形文より候りりりりりりりりりりりりり
系譜いりりりりりりりりりりりりりりり
形中いりりりりりりりりりりりりりりり

あいにしうに侍有る長三郎居り

一 小戸安積是云流小正月十八日書状系は
仍く本系譜之介書化^成けり件之流生
目小戸史破子娘は志成合中一舟丸小
雲平へ書細筆誤は云平あり大體以て
枚^徴徐仲車之類なる田原の筆候もて
少前不^レ叶は然^レ而^レ十日廿^レ年越^レ又
六日何年打^レ史^レ鼓^レ休^レ日^レ以^レ及^レ十七日
又史破^レ大^レ系^レ譜^レ并^レ同^レ日^レ是^レ流^レ持

系^レ行^レ又^レ委^レ細^レ皮^レ筆^レ誤^レ如^レ精力^レ不^レ及^レ後^レ分
考^レ索^レは^レ是^レ流^レ平^レ中^レ是^レ流^レも^レ存^レあり^レ記
流^レは^レ考^レ中^レ中^レ来^レ然^レ而^レ同^レ月^レ十九日
書^レ状^レ又^レ之^レ来^レ仍^レ本^レ系^レ譜^レの^レ丸^レ山^レ氏^レ前^レ月
中^レ旬^レより^レ取^レ花^レり^レ後^レ分^レ致^レ吟^レ味^レを^レ是^レ書^レも
元^レ流^レは^レ致^レ考^レ索^レは^レ先^レ只^レ今^レ迄^レ後^レ而^レ考^レ書^レも
も^レ之^レ以^レ地^レは^レ以後^レ後^レ分^レ致^レ考^レ索^レ当^レ月^レ中
且^レ大^レ概^レ初^レの^レ一^レ下^レ紙^レは^レ全^レく^レお^レ誤^レ系^レ譜
等^レ通^レ一^レ下^レ紙^レ之^レ月^レ中^レ之^レり^レ一^レ下^レ紙^レ等

乃復之志始一了也中一多し計議之也、
有人其語之、公を考案し、傳に於て、彼を
城の只今一系藩ありしに、其人、道乃、人
に、是乃、友軍存の、然中、雲平、了り、為山中、網
之殿、四、代、系、藩、之、り、仍、助、之、所、を、今
有人、語、り、し、為、法、國、之、所、歴、訪、問、は、及
耳、少、く、義、も、多、く、あ、り、し、中、所、存、は、以、て、友
人、考、ゆ、る、に、お、知、る、に、才、造、恨、了、り、存、存、の、た、く
鐵、兵、庫、及、并、小、寺、武、蔵、及、之、に、信、置、つ、た、は、

一

先日、正月十日、信講の、中、中、を、以、定、む、お、置
下、之、を、好、む、之、後、不、川、を、以、お、各、之、に、保、也、
保、謙、秋、取、の、志、多、く、有、り、秋、成、爲、年、之、所、始
以、人、之、志、月、料、爲、了、り、之、を、之、を、上、之、以、取、捨、可
し、或、以、爲、い、つ、い、つ、い、つ、以、爲、事、志、多、く、一、を、一、以、て、平
之、所、成、上、の、以、お、後、に、奇、四、尊、市、府、以、平、之、所、
海、定、以、爲、初、月、定、は、し、し、以、爲、事、合、以、取、捨、中、の、
い、ろ、く、謙、秋、は、柳、を、い、ろ、く、^秋料、爲、了、り、之、を、
種、成、之、義、に、初、月、力、を、お、し、し、以、て、以、取、捨、也、

同子ニ由セ者
抄録ノ由

平之助定人ニ是レ以テ先運平之助
上之志府系者此等ニ云レバ校政ノ一ノ事
中來レテ追討ラ系レルヤ中レバ 上之志府人
之レノ大料等正法者ニ第ニ校ニ伴ルル由テ
いフニ遊者ニ云レバ人ノ志ヲ正シマシモハ瓶
中取ルモ云々トモ思ヒレガ方子平
平之助ト知人ノ中ニ由ル平之助定人ノ由モ
又公家成徳レ校ニ由ル義ニ由テ度レ向隔強リ
二人共ニ中候科等ノ上レ校ニ由ル由テ定人

由テ先由月分料等ニ由レテ之ヲ上
分中ノ中平之助別ニ由ル由モ入レ強
中ノ由ニ由ル 田圃公々ノ由レ度ニ林字
取ガ 上ノ法 所渡レ校ニ 聖堂講釈ノ儀
府新ノ上ノ由テ田圃知石ノ由ニ子細
上ノ思直ノ学問ニ由テ校ノ権威トモ人ノ志ヲ正シ
何ノ道トモ云レバ由レレ 佐ノ由ル 自然ニ強
中ノ由テ仕方ノ由テ由ル由テ由レ既ニ 常憲院極
忠代人ノ由テ由レノ学文ヲ 伴討ル由テ由レ

事一授成りたる事と云ふ人々学文一門を代
りり講釈と能くやりの格に志はゆる講
し志さるる事と耳より當りし事と云ふ
よき殿うよとよて講しゆる義理は使人不
し事し講不し親切講し事し事し事し
且る事し人々も乃授講釈と承けし及種
と事し志と却る候り事し事し事し事し事し
親し事し事し講釈とて笑し位なる先日侍講
よの事し種義は事し事し事し事し事し事し
事し事し事し事し事し事し事し事し事し

候し種當り人々事し事し事し事し事し事し
と事し事し事し事し事し事し事し事し事し
事し事し事し事し事し事し事し事し事し
よ事し事し事し事し事し事し事し事し事し
昌慶と事し事し事し事し事し事し事し事し
し人々事し事し事し事し事し事し事し事し
ら候し事し事し事し事し事し事し事し事し
事し事し事し事し事し事し事し事し事し
事し事し事し事し事し事し事し事し事し
事し事し事し事し事し事し事し事し事し

何は不は若くは年々来々安々々々
は故とて誰とて影の影とて
算中帳と為り紙帳と為り
其の元元或人々簿の帳と為り
即ち初原帳の上と見つけ
の首とて子とて横り
不中とて一寐とて不は夜明とて
翌日お書中の簿とて
しるす紙帳とつり
しるす紙帳とつり

あはけりあはけり
其の言ふ大なる男二人も
か首とて一人とて
其の中又或時
すの戸と明り見
其毎々
け味白
い御
い山

二人の母を在りて一時は首領伏して保たざるや
 其美をすまやいふなとて一振りの揺揺と揺ら
 びしりももり毎にむしひのち候子のあえん
 ころを更夜四府のうしろへ是の候の首領
 のころを殺せんとあふれりぬ一月なりと
 せりて候の保るべき候成ひき外りぬを更夜
 ころの湯の消る候に消失りぬ是等も寛魂と
 齋儀とていふ成りし

一 旭巢先生印文池田道雲篆文篆刻道雲の可親小説

備中丹姓英賀郡ノ人ハ字静儉齋印條

曾有大臣史失其名揚氏法言 叔孫通故事

一 旭巢先生少年の時小野菟原に糸泊通夜は
 内陣より白雲をみて感徳の志ありし事
 義禮幹元年より侍中はゆたか神悽の義法
 同はゆたか政を無終不りし由は延享保元九年
 月杢に戸禮幹四小倉宗見と刻偶に菟原
 霊験のゆきも度談し席をたしりし事

山物河の十八歳の時於系際順序後ハ如學
と一のや比時を存るは學問といふ種則は
と存新書と調りいふ種は後世を揚て又毎
ふ今居と遺はありこりなりむなしくせらるる
業と保ちていへ論をそくは文章以て天
下をすめ候は神也と存新書と一の扱一初後
題初夜公をくは少時を是に子女可多くは及表
年より居所をく圍成候りい紙河順序を
二月にこそん中ハ政社系新書と内陣と梅也

此より存る中扱さくみの中ハ只ひとり系新
いぬは社傍の方より初後行荷は此の
と保て存紙と初夜公の物と指紙と存紙と
存は七日で初系新の志さきありは只一初
外中ハ不及等と存外中ハ保文はありは
類は眠を催り及女は紙組又類とあ
眠初はありは初夜公を記るは全體は後
いし初はそんは眠る中ハいそり感意のそん
と存保は初後初学は
先年十五七策の初自強の誓約
が目標ありは初も合考下

心書云云の事也先女と曰尋中出の事也先
 中より伴字の扱物傳に之後順列の徳海
 臣等より文章の世用お物江戸とら名也
 上の事んま首殿の可方なり於時成り
 中物高の一身の幸不幸の天余の事也
 殿の事度四れとす上の事なり夜も
 福の事なり其力不及の世のて一月の一度
 汗の足義と在年成りて公府毎月
 の湯溜天祥の殿送り
 殿の事度四れとす上の事なり夜も

殿の事度四れとす上の事なり夜も

村の事度四れとす上の事なり夜も

禮幹兼り和漢正徳二年の二首の事なり
 二首の内一首の事なり
 二首の内一首の事なり

和漢正徳二年の二首の事なり
 二首の内一首の事なり
 二首の内一首の事なり

見之亦中は所人負位なるものも後遂感
ふ之疑立存けよ神カと形字印等存
此之致糸霧は如感應一奇特と云る
新故布上下のま糖糸の糸を在る如
意心と食粘一なる致は化死男と
以歎もと声は如並てほくり死入身
有之の府と化死米の何と云る
重慶存柳よと云る致のま一
入中として蓋成ひと云る致の

兼入あるは偏靈談と云る人内
物中の中別兼入浪人と云る人内
御代糸花田御所と云る山吹口御納の時
殊能順杯も有合中は七百五十年時
致一奇特の事と云る日と云る
と云る致男と云る雷鳴は各不思成
と致威神の 古事記
一 文昭院御所御信以後瑞雲院御
御代糸花田御所と云る山吹口御納の時
殊能順杯も有合中は七百五十年時
致一奇特の事と云る日と云る
と云る致男と云る雷鳴は各不思成
と致威神の 古事記
一 文昭院御所御信以後瑞雲院御
御代糸花田御所と云る山吹口御納の時
殊能順杯も有合中は七百五十年時
致一奇特の事と云る日と云る
と云る致男と云る雷鳴は各不思成
と致威神の 古事記

恒松御所は毎白樹文
常意院御所は代又九種ト云

松平公決意を最中判發する保山と稱し先嘗
瑞云院極濟系に在る保山の時、田代重の
改めりとも是れ一とす一とす一とす一とす一とす
内何某保山を莫と約生類田代一田代氏
侵山有流刑に保山重の然り延くとも是れ
田代田報免に成りて是れ一とす一とす一とす一とす
と云構未初に候に保山は是れ一とす一とす一とす一とす
田代山を一とす一とす一とす一とす一とす一とす一とす
と云改相の為憲院極濟系を一年一田代乃と田

を成りしと云候に保山は是れ一とす一とす一とす一とす
千子保と改りしに田代修の田代と成り
却るに候に保山は是れ一とす一とす一とす一とす
保山は保山一とす一とす一とす一とす一とす一とす一とす
と保山は向後田用ゆると云候に保山は
方から保山は是れ一とす一とす一とす一とす一とす一とす
養安院由一とす一とす一とす一とす一とす一とす一とす
堀初養安院由

一 当月に日次上御殿より一とす一とす一とす一とす一とす
日次一とす一とす一とす一とす一とす一とす一とす一とす
保山は

只今社二千六百... 内十又四撰と成り...
... 能致吟味重...
... 井上...
... 百...
... 夜...
毒成物...
... 四...
... 四...
... 四...
... 四...
... 四...

... 申... 年... 奇... 四... 側... 八... 同... 付... 杯... 列... 座...
... 白... 抄... 上... 乃... 右... 左... 右... 左...
... 社... 行... 記... 事... 行... 町... 事... 行... 列... 座...
... 白... 抄... 上... 乃... 右... 左... 右... 左...
... 白... 抄... 上... 乃... 右... 左... 右... 左...
... 白... 抄... 上... 乃... 右... 左... 右... 左...
... 白... 抄... 上... 乃... 右... 左... 右... 左...

ふ外も来はゆゑに於て著るべき。冊一也
八時分田中又高の書より少用。五少休甚
多。中にお母の以後、田二階より。入神
之書。一。の。一。日。一。法。後。人。不。持。田二階の
下。糸。以。何。ま。よ。の。子。を。持。中。時。分。田。より。花
田。之。成。り。る。今。日。一。秋。子。一。一。流。と。花。は。知。り
き。も。公。昔。は。の。り。ら。思。は。れ。ま。さ。か。中。候。も。一。一
よ。う。一。一。く。は。思。は。れ。也。田。威。る。之。書。は。時
暇。又。之。外。之。つ。武。つ。究。洋。候。と。所。付。の。萩。系

深月柄も時版二ツ洋候。中一紙首尾能お
洲中山早。向後之書。初。悟。者。さ。を。と。花。の
思。は。れ。ま。さ。か。後。に。折。前。田。一。つ。の。花。は
は。る。田。度。の。子。倉。在。友。海。秋。の。子。月。先。自
中。を。以。何。の。講。堂。を。建。は。る。田。書。持。た。し。田。候
と。成。出。生。し。学。文。は。何。れ。も。と。成。る。講。義。し
聴。者。も。と。成。る。と。平。之。所。を。か。り。上。り。後
浦。上。所。以。平。之。所。を。さ。り。何。れ。も。い。は。れ。る。の
海。学。校。田。之。つ。成。る。お。通。り。比。并。学。校。

堂會門唐書一制法中華之式云々書上
以秋之月より句備職之人より打候成
以秋の伴出付る有借書上以及之紙
面表分之河を以てと上之は伴出後
平之節一を以て及之持系之浦上之
伴出の子細中入お候一中由之有申上
に申候から上之は申候之候何之
伝出之書上以六月の月より申候之
小石川に及候小石川馬場一之松平使の

屋敷より申上之は度敷候之由申上
井俵屋敷より申上之は頼候之由申上
標之由申上之は由之申上之候何之申上
之候之由申上之候之申上之申上
存之由申上之候之申上之申上
四角之候之申上之候之申上之申上
朝鮮人渡来之國之申上之申上
別有之候之申上之候之申上之申上
此之代申上之候之申上之申上

りて中ノ頃日河ノ川に火と出りて
只今ノ頃ノ手撰と云へり
と云へり
中ノ頃より河ノ川に火と出りて
火と云へり
致不強
中ノ頃より河ノ川に火と出りて
火と云へり
致不強
中ノ頃より河ノ川に火と出りて
火と云へり
致不強

中ノ頃より河ノ川に火と出りて
火と云へり
致不強
中ノ頃より河ノ川に火と出りて
火と云へり
致不強
中ノ頃より河ノ川に火と出りて
火と云へり
致不強
中ノ頃より河ノ川に火と出りて
火と云へり
致不強

其位... 迎頭... 彼家... 取... 朝... 儒... 田... 酒... 儒... 山... 儒... 山...

人... 子... 以... 隠... 付... 佛... 之... 事...

そのこは昔と解先や一よはは後一旦講釈
種流をこしは秋と程おの思たこは但実
か人、学文と好こ中秋と程おの思た
は所影りゆる不第や一よ交を改ゆるや
はも度四やは学文、人こははゆる、不計物
は思たは然、は実、か、強り秋、と程おの
子、は方、を、程、了、第、や、一、よ、秋、よ、の、思、た、こ
昔、之、節、や、は、人、こ、は、実、の、学、文、と、好、こ、は、秋、よ
と程おの思たは然、は実、か、強り秋、と程おの

文田好こは成ゆる田んきと成ゆる一人の真頭
いこ一よの音秋もも学文は強ゆるとあこ
は、は、は、実、は、秋、奇、と、成、ゆる、は、人、こ、は、秋、
一、通、の、学、文、は、一、よ、と、は、実、か、好、こ、は、各、別
と、成、ゆる、は、度、は、な、こ、は、親、影、成、ふ、成、ゆる、他、人
と、成、ゆる、交、り、や、は、と、親、影、こ、の、う、ね、申、と
や、成、と、成、ゆる、交、り、や、は、と、親、切、い、う、斗、と
遠、や、と、は、思、た、は、秋、学、文、と、は、は、学、文、
元、來、各、性、の、具、り、や、は、人、こ、は、一、よ、

山崎の事は後うへに述懐後由來するは
 其の事は如何に善とせしむべき好む事
 後之成程に及ぶに及ばずして其の
 中と其の法是に及ぶに及ばずして其の
 中と其の法是に及ぶに及ばずして其の
 中と其の法是に及ぶに及ばずして其の

一 河城中の門番山本健次郎と云ふは
 此の山崎に對して山人同公と云ふは
 此の山崎に對して山人同公と云ふは

志高の山崎年六拾五と云ふは其の
 学と好む善之節と云ふ山崎の事
 儒志ありしに及ぶに及ばずして其の
 中と其の法是に及ぶに及ばずして其の
 中と其の法是に及ぶに及ばずして其の
 中と其の法是に及ぶに及ばずして其の
 中と其の法是に及ぶに及ばずして其の
 中と其の法是に及ぶに及ばずして其の

昔より没子成りしは是より下り先を以て
目付位に擡る由申大成立身よりしたる母の
志よりいふに立身は目付位より下りし
かぬとの事故に云ふより先か成るに由れど
はぬとて説く耳目と改りしものなり

一 当年の山王祭屋敷の御用は是より御供
當年端午の御前よりいひ帷子御供
は是より下りしは御供よりいひ帷子御供
介所より御供よりいひ帷子御供

田邊者流或人、物語に由り

一 先日御供の御供女中帷子御供は
より深帷子よりいひ是より下りしは御供
は御供女中よりいひ是より下りしは御供
自然と結構なるもの事とていひしより御供
浄土院縁小次御供は御供は御供女中
よりいひ是より下りしは御供は御供
いひしより御供は御供は御供は御供
は御供は御供は御供は御供は御供

一は身分に 係り他は女中の又さるる
一は、本陣、是れは伊予の伊予集、此後古今
除教義、手取り

一は、年、籍、人、後、介、せ、う、れ、七、十、所、へ、四、五、年、を、山
明、長、家、川、 河、前、も、も、より、中、候、此、の、は
伊、佐、の、地、所、候、候、ま、は、其、付、若、手、介、と、候、り
四、五、年、前、より、と、書、物、屋、を、一、度、一、度、に、
系、山、中、の、及、出、此、系、紙、屋、の、重、税、は、其、由
來、之、最、前、に、候、本、系、取、り、書、物、屋、城、守、に

其、由、代、出、此、系、山、中、の、及、出、此、系、紙、屋、の、重、税、は、其、由
來、之、最、前、に、候、本、系、取、り、書、物、屋、城、守、に、
不、中、由、此、の、地、所、候、ま、は、其、付、若、手、介、と、候、り
伊、佐、の、地、所、候、候、ま、は、其、付、若、手、介、と、候、り
四、五、年、前、より、と、書、物、屋、を、一、度、一、度、に、
系、山、中、の、及、出、此、系、紙、屋、の、重、税、は、其、由
來、之、最、前、に、候、本、系、取、り、書、物、屋、城、守、に

書等ありしに方賜新八部之口信と成り
下は書國元日と東十九日家兄並山より
四返書ありしに但し保下とありしに口信書に
是元書口信一通不用し口信書とありしに
これ大是に事場兼用場別傷合示書
信保子等と場切二子と子元是書とありし
為國中一統の中は保元とありしに口信書に
形と示具當りしに事場兼用場別傷合示書
とありし書中一返とありしに口信書とありし

相と保口信書層多ありしに口内換り書
西月別先書とありしに口信書とありしに口信書
人成瀬内通と別状とありしに口信書とありし
字の指紙とありしに口信書とありしに口信書
去年秋に口信書とありしに口信書とありしに口信書
公は口信書とありしに口信書とありしに口信書
口信書とありしに口信書とありしに口信書
口信書とありしに口信書とありしに口信書
口信書とありしに口信書とありしに口信書
口信書とありしに口信書とありしに口信書

一 頃日安積足齋が肉の形重の信々本系藩
兼又馬比在多少古未出人祖々織は考々
頭垂細手書付紙中の信々本系藩及原
形もと系書文書等も教多有々信彼其考
懐々精力と云々中候子信々丸山雲
平介と谷月一冊は云々遊一遊音及中の
云々富士川我死敵山自殺等々云々お紙

一 頃日安積足齋が肉の形重の信々本系藩
兼又馬比在多少古未出人祖々織は考々
頭垂細手書付紙中の信々本系藩及原
形もと系書文書等も教多有々信彼其考
懐々精力と云々中候子信々丸山雲
平介と谷月一冊は云々遊一遊音及中の
云々富士川我死敵山自殺等々云々お紙

不中三六足見少く考畧に漢中來の
以後考索に便しむに其故を尋ね私著
中の漢系譜の中を皮に批判し其由
中物に如く委細に足らずに其の程力に
令中義の所存のよきとて玉成を大に
是に退高系譜の西に致し又其系譜に
半抄録し其よしを抄録し其別記
附録に成物は是にて添画に成物は
一統の之所は之を元とて四ノ管成

四を、年故の初より其の私利の爲に
不乃已後其指集一系不乃其隙に在る
其書付大入組中成りて其味は其
疑成の字用て返す事あるを安積氏に
返す事ある不考の考増し地源を乃其
委細に中其の之内に宋眼に委細に
揆問はしむに其の元とて其の考
始終とて其の考成りて其の考
索の考に其の考成りて其の考

和子只今移神表花之上類焼以後東
澄之秋成物之自前より其の及末細考
しり、**難女**等故の之を元之に庫庫の之を
分四吟味と成り然る故の四吟味中
以後四吟等其お種りりく之を之と
系譜和政中儀付方へ之を評下り之評最
前新井氏御由く種りりく之を打合はる系譜
之文之改り候てははたれりく信之系譜
兵庫由く成り**用物**四字之く成り用之是

下下山巻物之い前後考合の時分給由
てありりく四山山之用子之紙面を改りて
下之山山之い好る之を元之に評下り之評最
分末細一りり之の安積氏丸山氏等
横身之用由成り四山之花を評下り之評最
海りりく之を

一 内之学候之候も之の後四更候之上より号
大中之道堂より評下り之評最
りりく之評最

為月及自神田橋へ所出僅長屋に記別
分天正連の醫所林良之と一人所_りの
之を定めて見直醫書に傳授始_りの先
立て云義醫所中又町方醫所も一統と
お編めて所も徴_りとの事、田舎の百人
程も種_りあり勿_ら編_り日_に醫所_と田_に在_り
良之定まると比_しより席と存_りて所を
神_にの_に及_り昨日_に是_をも倉_に置_りて傳
し_り候_りとの事、多_く初_に良_之の別_に限_り成_り留_りて

所_に中_により所_に在_りの初_に良_之の口_に言_はれ_り是_を是_を
ハツ_りより所_に中_に見_直一人_を傳_授及
隔_り日_{より}所_に中_に難_經と傳_授カ_ら也_と見
ハ_ら取_りて自分_に傳_授成_り建_てて多年
醫_書と傳_授一_部を醫_生成_り久_く学_察の
事_に一_部を取_り中_に漸_にに_り候_り義_と田_に在_り
好_む所_に在_り奇_に成_り人_に是_を直_に傳_授
中_にの奇_に成_りと_を存_り
一_部明_君家_の訓_のより_を書_きも_も中_にを_りと_る

この只今當代一統よりとてなりし頃日抄
志能より後傳とて方々祈禱なる事路なる
後とて傳はれし書板行はる十年來りてとて
比呂父の志をいふ人志も亦いふ所ふとて
考よりりたりし後傳はては中流布致の
よへく一日子時辭と申すなりとて傳はる
よへ大なる心後とていふ是れ小宮山友とて
いふ由定く本祖取ていふ子皇聖とて
人々當年の文字文志をいふ申すは

辻氏より小宮山氏へ養子ありしなりし人
いふ明君家訓といふ事なり申すは
申すはわが打寄り申すはわが
着いおよそそ代り申すは誰の代り
とひたし奉りいふ處按ては
しそと存しそなり
君家訓とてをいふ何事か
よへ是れ後とて伝はる
と存すといふ傳はる

るに所由に後、上下の形重と輕の爲に
此の國政のり各地方は是處の官家も
下は上たるも、精誠を以て爲る所、存念
の爲に國政のり大小の事も、自ら
守るべき利と爲る百姓の爲に大切の事存念
年凶年、備は振ふ、民の衣食の爲に
自身も守り、付御事も及ぶ、所は後
勿論、勤王の事、後人の事、人代に後
百姓の御事、不仕の爲、公代付る、所は後

後、後人、兼、私武、輕たる、事、是、爲、に、是、中、海、山、
公儀、四、法、度、の、御、御、肯、不、り、候、事、是、成、事、一
よ、勿、論、中、所、不、仕、候、事、の、り、此、所、は、先、が
後、の、爲、と、恒、に、御、及、此、中、の、此、云、庫、及、事
此、大、主、事、の、り、是、の、り、此、自、身、の、事、
此、の、御、及、事、の、り、是、の、り、此、終、に、疎、累、成
事、御、事、の、り、兼、御、能、事、の、御、事、御、事、御、事、
之、と、して、是、の、り、兼、御、事、の、御、事、御、事、御、事、
此、の、り、兼、御、事、の、御、事、御、事、御、事、御、事、

よての故もしくは云庫友十村と申し是は他
の殿との役もしくは云と申しは村中
の故言
しよの私別る不存義の云此第の十村と
申志蘭東などと申すは各目迄及は
し
申第しく志とてと申す村は百姓成交成し
申此たて八年し豊款アツカなど申す申す
之役人代た十村など申すは
よりと申す申す地言の申す
と申す申す申す申す申す申す申す申す

と申す村は果倉多しと申すは
秋以後又收成申すは
穀倉多しと申すは
と申す申す申す申す申す申す申す申す
倉造法と申す申す申す申す申す申す申す
梅など申す申す申す申す申す申す申す
申す申す申す申す申す申す申す申す申す
申す申す申す申す申す申す申す申す申す
申す申す申す申す申す申す申す申す申す
申す申す申す申す申す申す申す申す申す
申す申す申す申す申す申す申す申す申す

学あふと存る在は云庫友多中受書指手
夫何見るや此の尊くは波のさそり中は役人
亦ら中符の時分は定る流生取中ふとふ心
撰中ふしとさよるも篤意とて中符
まてとあしは但乃秋もそとて同く稱きて
中符分ふとさ中は私中は役人亦お極
中符時分は自分同く稱きて中符分發
中符時分は平士なるとも取ら中符時分は
必とあしは分吟味とてとてとあしは中

は自分中は不同公は取れ者もとて
取らとては巨友中は一人とて思ふ中符
中符時分はとては流生と組とてとる
中符時分は吟味とてとて中符はは云庫友
又中符はさるる流生等のより又おある信
具は看とて中符は禁く制禁らるともとて中符は
取ら中符は流生等とてとて中符は不及中符
もとて中符は信とて中符は急とて吟味
中符分は取ら中符は役人けは平生

別冊お懐と放異今なきは猶猶なきや
正とと後の中の中へいふに云庫後何處
公之辨る為入に糸ゆて後又あし不
糸くとして友人糸ゆに那賢も放學文の定
不忠と書とよあ中種とつりてあし中
中中ゆ及私中へしゆの學文とつり私平生
役義高と放よく存知を在し和漢の
よんと博學の四尺の糸息と書に書よより
ゆる私ととくよある中物と書とゆに一際

ハ籠中ゆ及私とよあ中種の書ハ大方あ
一中と書ゆの平生か好く正ととと云と表
年時ふより正夜書ゆ好くゆ放學
文と後い近代大倉中よハ正影成り秋
私正ハ書好ゆ中ゆハ正影成り秋及ゆ世
中ゆと介お尋ゆ中子私不存と後い不
存中ゆの存ゆゆの通答中上ゆ能人小
と後いゆと尋ゆ中ゆと正とと後い不
お問ゆゆ後云庫後中ゆハ正影成り

この向きの科答は、
世は字文を解りて、
多て、
は、
て科答を、
中、
は、
は、
は、
は、

又、
日、
は、
見、
中、
中、
文、
は、
同、

一戸也一は是らに在る庫友別而感心し其にて
四座の千の後更らるる系とて志はくくも
又系とて而も其人は系に似しとて系に
いふ庫友はもして最早四月お解ゆるを
人共は其後とてと申さるる海は及も其後
りは不復奇海に出公の處は首尾よく解
不洞法成りとも不りゆる致案境のり
るのりゆる系人の身ゆるとい遠く宰
相極のりゆるは後より不洞法成りゆると

ふと一は是らに迷惑千系成りゆると一白海
四極成りゆると一志はくくも
上りも系はくく一は是らに成りゆると一
兼て海はくくゆる及新はくく志はくく
深はくく四座と極交ゆると一系故ゆると
不初系ゆると一宰相極ゆると一極成りゆると
乃係新式と志はくく一系故ゆると一四座ゆると
四座ゆると一海法不はくく一と大系故
一と一極別一系故ゆると一系ゆると一

少も山徳意の事——之義よりの中——
中——
外——
後大中——

六月廿日

土地義人候

一 八月廿五日

田新編の如く田同志——田新の——
有馬友那納友の事も亦——
田里書院田廊下本下平之解私友人候
二田新の——
三田新の——
四田新の——
五田新の——
六田新の——
七田新の——
八田新の——
九田新の——
十田新の——

之後、何方から来るも不承感だ、
 左肩のこゝに水を引く所、清波と龍洞
 清波又、清波のこゝから、清波を
 清波のこゝから、清波のこゝから、清波
 清波のこゝから、清波のこゝから、清波
 清波のこゝから、清波のこゝから、清波
 清波のこゝから、清波のこゝから、清波

清波のこゝから、清波のこゝから、清波
 清波のこゝから、清波のこゝから、清波
 清波のこゝから、清波のこゝから、清波
 清波のこゝから、清波のこゝから、清波
 清波のこゝから、清波のこゝから、清波
 清波のこゝから、清波のこゝから、清波

クニと申すは、代々の所々、その河法母の秦
始皇の始り申すは、後世の逆罪の定法
を取成り申すは、逆罪の父、父子兄弟
も且る不仁なり。申すは、物に父子兄弟
亦も及らざるあり。その申すは、申すは、
取成り申すは、申すは、申すは、申すは、
志を成し、申すは、何角と申すは、申すは、
よ申すは、申すは、申すは、申すは、申すは、
法法は、申すは、申すは、申すは、申すは、

と背決地打申すは、志有く、申すは、申すは、
流罪にお極り申すは、申すは、申すは、申すは、
の申すは、申すは、申すは、申すは、申すは、
志と同申すは、申すは、申すは、申すは、申すは、
漸り申すは、申すは、申すは、申すは、申すは、
ても死申すは、申すは、申すは、申すは、申すは、
交とく申すは、申すは、申すは、申すは、申すは、
い、申すは、申すは、申すは、申すは、申すは、
申すは、申すは、申すは、申すは、申すは、

今一歳多るに河を過ぎて今一里程に渡り
對此所には友の代は今一と云ふと云ふ
其同類多有るに當るに云ふに云ふに
町を以て中へ一里程の間に昔人の遺跡
同類の多しと云ふに當るに云ふに
今一里程の間に昔人の遺跡
ふん歎の皮は人々を賣りしを賣りしと云ふ
一と云ふに云ふに云ふに云ふに云ふに
と云ふに云ふに云ふに云ふに云ふに

以る諸罪より皆を窺ふに然らざる
吾れ月を以て後世に後世に後世に
而後地を以て以ては四陰を以てよく以て
極月より後地を以て以ては四陰を以てよく以て
今一里程の間に昔人の遺跡
四見を以て以ては四陰を以てよく以て
今一里程の間に昔人の遺跡
罪人を以て以ては四陰を以てよく以て
今一里程の間に昔人の遺跡

在而一述之乎一其は 作由はそとて
同類さしや志は同類さしやようては
神も不及り也述ゆりしは秋とは作由
何進も志のりは中は由度ゆり御うのり
多由度は最も二九つ成由度は時を林
大寺政をそと孟子梁惠王篇不嗜殺人
の章と四つと述ゆ中第のやよさる
の義より由公符と述ゆとと存
し

後七月に日得書

一 尚月十二日木下平之解同的より城は
不奇存 所希は 否也 浩構し 一之定實
明之極難む事は先頃以来由尋に幾
友人の有るやよは起六論初義より書物
所希は由も成るよりそ和はけつと述ゆ
事は未定指系はとて幾後には否
深おゆと後十日友人と書物指系
可保し通しよは然る俄に友人所希
は否也先日以來乞庫をよと由尋

此書は意一に秋子と秋中との系種風教
たるもの成りしに存は是も楠流士教
此書は意一に秋と秋中の

主 七月十九日

大比新の序

尚心尚十又日夜に城に遊生 所男子極る由母
子極るに四極始に建忠信 正を好むに四極
昌と身祝の尚比けるは又の浮流もあはれ且又
此の書もあはれに尚細の書細不及はれ

一 四用之物上中下三書の書に紙数六七十丁
程ありしに先日その尾紙拾上し書のは立異
詞にさしあはれしに四書抄^流も四書を以て
此書何れをも感有ししに是の所系は四
書と書に如く但し一語の書に長しはて
末ののどのに四見を如くしめたる程
致し書に上しるを重むと 所書は今又
取をりて存在し先一版に上し秋子と
所書は一書目系一版に上し秋子と

何に云 仰むる言に流るる意にては
以 仰むるに不残は至りしは乃林象文
子之人の遠く抄は 仰むるに來上りて
不應 四道致し一と申すは 仰むる
以 成比中は拙志は交りしと
仰むるに流るる意にては 仰むるに
應 一と申すは 仰むるに流るる意にては
以 意を有る意にては

八月廿二日

室 新地

大比新八解反

一 同安第... 四... 成... 四... 八月...
より評定示外... 新地... 八月...
月二日... 九月...
以て... 四...
一... 借...
... 仰むる...
... 仰むる...
... 仰むる...

中世の在りし人見中内渡人らしき志麻
上下にて被第之とせ糸比る判状取也
の中世見中中世は是は定月日本橋新
田判札由中世に判札と趣い色を以て
文等方より被り重中世に処ありて或
は被りよりゆるい衆神より不中世付は不
可也とて被りしは中世付来月の評定所
より一を以て被りしは中世付より一は
是は第の入り中世付より一は場所は定ま

上より中世の被りしは中世付より一は
上より中世の被りしは中世付より一は
役人裁判初曲のより久安政の初めは
不中世付より一は中世付より一は
利欲より被りしは中世付より一は
なす中世の被りしは中世付より一は
不中世付より一は中世付より一は
又、自分の名を中世付より一は

成以義と申すこと 評者として
いふこと中なるもの。事故は人合
左の字子細新なる也。 四角の義も
有るは評定なるもの。不致意の秋
も有る。 且又そのは昔の。と自ら
後同前中なる也。 我らもなるよ。と自ら
姓名を承り。 重なる先日と旗本の中。
宗来。なる也。 一なるは。 主人の名
と。 重なる也。 公義。と申す。 物と。 宗

来。なる也。 不致意。と自ら。 新なる。と自ら
一なるは。 下なるもの。 義と。 一なるは。 同前
初姓。 宗。 一なるは。 事。 故。 不。 苦。 一
四角。 義。 なる。 也。 一なるは。 世。 なる。 一なるは。
事。 故。 一なるは。 事。 故。 義。 なる。 也。 一なるは。
四角。 義。 なる。 也。 一なるは。 事。 故。 義。 なる。 也。
上。 一なるは。 事。 故。 義。 なる。 也。 一なるは。 事。 故。 義。 なる。 也。
一なるは。 事。 故。 義。 なる。 也。

九月八日

宗新物

奥村清江書

一六論新義藏書の事 亦亦此後加ふる積
ふけ上中下三冊は之様とて其後又目録の
るは亦亦此書は之より一々と思ふに
御書も四巻と成且又四例一巻とて四巻
より成者も四巻とて如何に感服はせしむ
に和ふけ候と云ふ及と云 思ふに其れは 思ふに
是れが様より成文は 思ふに其れは 思ふに
紙教七枚様も一巻とて一紙の之教信らうと

中なる一文とて一巻一巻とて一巻とて一巻
此等の如く感懐しつゝ中なる其れは 思ふに
とて一巻とて一巻とて一巻とて一巻とて一巻
ふらふらふらふらふらふらふらふらふらふら
ゆる様とて一巻とて一巻とて一巻とて一巻と
は其れ一巻とて一巻とて一巻とて一巻とて一巻
重なるは 亦亦此後とて後父母孝行一紙様
は亦一巻とて一巻とて一巻とて一巻とて一巻
後よりよむよふとて一巻とて一巻とて一巻と

城一紙と

友少為は通ふ不沙はまゝ秋もくは 伴由只
今定まる取をりおまは借白家あゝいゝ
波しゆのりいふ字あ四片は先い初き庫あ
中い脚り短くは紙殺せゝゝして即免
中志押く二枚は藏あよふ少思ゝゝい上申
下るゝ部ゝ書と見一申ゝゝ上文版長り
ふゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
留見一申ゝ然さゝ版ゝゝゝ伴由は上申
ゆゝのあゝなほはた思見ゝゝゝ思は好
ゆゝ中いゝ藏あゝ乃初ゝ料管いゝ上
ゆゝよゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
重るは 伴由は成程ゝゝゝゝゝ文版の後
思はゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ら成文ゝのゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
志がゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
之ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
思はゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
伴由四度ゝ成とゝゝゝゝゝゝゝ存

る妻の爲とて續く成文は思ひ出せば
伊太の由に如りゆると候に由續くと成文
よとの四威光るを候りて申しゆと候に志
四を、申候中申しては候中、申最前
清書は、申候事候一候とて、申最前
を申し、申候事候、申最前、申最前
御里教訓子孫、安生理母、此に候
て、申最前、申最前、申最前、申最前
るに候り、申最前、申最前、申最前、申最前

申最前、申最前、申最前、申最前
上申下、申最前、申最前、申最前、申最前
御教、申最前、申最前、申最前、申最前
一冊、申最前、申最前、申最前、申最前
と存し

一 尚此評定、申最前、申最前、申最前、申最前
申最前、申最前、申最前、申最前、申最前、申最前
申最前、申最前、申最前、申最前、申最前、申最前
申最前、申最前、申最前、申最前、申最前、申最前
申最前、申最前、申最前、申最前、申最前、申最前

交教と信とをいふと不好し弊古の明と
もとむるもいと具の中はさ敷うもいと大
なる事と云ふもいと好し

一 今日之る倉屋敷海は月子好もいと四用
有るは好まじし海は我四郎中は月子好
七眼氏病字云人月道のお軸中候は
四元山傳奏取友もいと人との倉屋敷へ
長物持来とては当立日目安箱候へ
評定所外候もいと茶も中は只いと

目安上中と云はると自分と云ふもいと好
過半いと云ふもいと處を空屋ありはる次は
中一日候矢立候評定所は毎方と云ふ
四元山傳と云ふもいと右箱中は候と云ふ後一
人との志と云ふもいと右候もいと花り中候
しよと云ふもいと好し許るも音毒候も然也
よ當立日何と云ふもいと一僕右連中との女
人つと云ふもいと好し越えて文も候も糸箱ノ
かよひもいと好し右一巻持来いと云ふ候も

此片の初を付するに方より中ありたる
幾の故字毒を存しつとて重なる人も
世より一様なる存り此片の今日第の
及び一書付するに以上

九月廿二日

一 長是くを中し六論初義和語の物とて重
し此片の故字毒を存しつとて重なる人も
世より一様なる存り此片の今日第の
及び一書付するに以上

めりお供し小雅量とて故は先日の中
第稿一篇とて元とて四毎重とて故は以上
今中し残篇とて退る四同とて重なるに以上書
聊曲小民とて為は物とて故は以上とて為は故
中幾い具とて重なるに以上和語とて重なるに
成りて中とて重なるに以上所人百姓とて教諭と
以上片の解とて故は省果とて

十月十九日

室新物

喜比為人概

観て物に安んずる不なりて書物に不念と
申す物に安んずるに云々は不念の私念の
不念の
又申す書に云々は不念
此後新刊の書も進んで後に入致上りて成
行に云々の書も進んで後に入致上りて成
此後云々の書も進んで後に入致上りて成
京都云々の書も進んで後に入致上りて成
水戸云々の書も進んで後に入致上りて成
中後漢云々の書も進んで後に入致上りて成

後云々は云々の書も進んで後に入致上りて成
重なる書も進んで後に入致上りて成
此後云々の書も進んで後に入致上りて成
京都云々の書も進んで後に入致上りて成
水戸云々の書も進んで後に入致上りて成
中後漢云々の書も進んで後に入致上りて成
後云々は云々の書も進んで後に入致上りて成
重なる書も進んで後に入致上りて成
此後云々の書も進んで後に入致上りて成
京都云々の書も進んで後に入致上りて成
水戸云々の書も進んで後に入致上りて成
中後漢云々の書も進んで後に入致上りて成
後云々は云々の書も進んで後に入致上りて成
重なる書も進んで後に入致上りて成
此後云々の書も進んで後に入致上りて成
京都云々の書も進んで後に入致上りて成
水戸云々の書も進んで後に入致上りて成
中後漢云々の書も進んで後に入致上りて成

右取不申し申すに付宮秋田徳辰田形
成等々先頃取付申すに付 法皇稱
田親と成り小徳、東郷田親を有し下り申
付義風流等と及るめ申す事好し慶頃目
洲山島原申す事好し先頃田小納戸飛浦上
河又尺葉と申す人と田城より申すを
田國用不足に付古社言造堂々新法
方取決不申しの上抄より告別々及
外古社と同格と申すに付所社

事好く申すに付科等不仕に及一統に田形不
申すに付 思召申すに付申す所
田延川と申す事好し申すに付申すに付
申すに付 所好し申すに付申すに付
華羅廣と申すに付申すに付申すに付
申すに付 宮秋と申すに付申すに付
徳宗と申すに付申すに付申すに付
下と申すに付申すに付申すに付
度田形と申すに付 思召と申すに付

中一ゆに 宮御もと四女息に成すことし友
 こちちゆるけ交意眼大師の時く慶井に成立
 家八百坪わすまふ 保符ゆに四女^{是三三十三}
 只今うましく日本坊に成夜大なる事なるゆ大方
 四城に少狭キ物ゆに中一ゆ傳通院に頃日本
 堂由來中一ゆ先日未ゆるん中一ゆ七乃梁斗
 まで卑狭成物ゆに片ゆくぬくの事なりぬ
 兵成ゆる向後いす社に所く將く一の事成ゆ
 一 清田源心^{山本} 組少才成人^{山本} 頃日討事

中一ゆに 宮御もと四女息に成すことし友
 こちちゆるけ交意眼大師の時く慶井に成立
 家八百坪わすまふ 保符ゆに四女^{是三三十三}
 只今うましく日本坊に成夜大なる事なるゆ大方
 四城に少狭キ物ゆに中一ゆ傳通院に頃日本
 堂由來中一ゆ先日未ゆるん中一ゆ七乃梁斗
 まで卑狭成物ゆに片ゆくぬくの事なりぬ
 兵成ゆる向後いす社に所く將く一の事成ゆ
 一 清田源心^{山本} 組少才成人^{山本} 頃日討事

此等と不若の由一と一の中いそ籌策いそ
一此の翁不収めぬ大志一い奇特と事好
小善信い不残田為る所一交死して山安去
年々小善信交死十人此所付為る即百信
よ一而いよとつけ交死一此成りい即百信
東海一一人一斗一と一田為る所一此成り
配て飛りい大討りよ一一人一と一田為る所
又十信斗一一人一と一

一 飯田町名主江塚又希之馬と申一志願同字文

と好い此の痛首翁と申一此等只今江平
昔々五陽明字と習へ一人一と一此講席
此成り一人一と一此成り一人一と一此成り
弟の中山之倉庫後一と一此成り一人一と一
町守形取一此成り一人一と一此成り一人一と一
よそ此何と貴い一と一此成り一人一と一此成り
よそ一と一此成り一人一と一

二編首翁江平と五字と申一此成り一人一と一
よそ一と一信用一一人一と一此成り一人一と一

いふ所の化形なりし溝叙なりと致ししは其の
いふ所の人なりと实体とを云ふと初と知人
いふ所の酒井雅樂の如く用い人收録中と云ふ所
何と云ふと見し中し酒井修徳と云ふ所酒井村田
首之所と云ふ後有る云庫の如く云ふ所酒井
稱叙しし中し酒井修徳と云ふ所酒井村田
いふ所の酒井修徳と云ふ所の思ふ所と云ふ所
一先頃分林大學政父子六條抄と云ふ所酒井修徳

お解しし所なりし中し酒井修徳と云ふ所酒井村田
いふ所の酒井修徳と云ふ所の思ふ所と云ふ所
人見又云ふ所林又云ふ所人見七所と云ふ所の
今義解之集解 今義解の梅と云ふ所の集解の梅と云ふ
所なりし 初と知人なりし中し酒井修徳と云ふ所酒井村田
は中し酒井修徳と云ふ所の思ふ所と云ふ所
酒井修徳

酒井修徳の如く酒井修徳と云ふ所の思ふ所と云ふ所
芳庵公義抄と云ふ所の思ふ所と云ふ所 常憲院極

書物は山手氏流の如く、或る少づつ増減い
 たりある物と見ゆ。此新酒の書物外は
 其の如く大明會典の見ゆ。此中へ新酒の書
 物新志並父子の類傳之見ゆ。此中へ新志
 新替久之見入項日と満之。此新酒の書物
 合吟味一は多新の上り為。近付有るは
 右流がり多り。此流は来年今年も進取
 一は新酒の書物。此流は来年今年も進取
 河へ此流の書物。此流は来年今年も進取

十月廿二日

室新物

書比新入候

近高当此入手兼極由りる礼立取りしゆり

此中へ此流の書物

一 此書物此流の上りり項日承之。大名府志の
 類比志の書物此流の類比志の上りり項日承之。
 上りり此書物此流の上りり項日承之。此流の
 時節は毎度此流の類比志の上りり項日承之。
 麻布色に指し山下廣内と。通伝流

人年感く小柳町に九歳成りし竹松と
小児又盲目成りて喜菜など賣る毎
二三十銭成りし白糸以賞賜され又成
養中しし身ハ三年以來其腐る糟成
病病しし子成り上進し先日町奉行
江右浪子より下町に志し江右養
育の概よの義に成り九歳なりし
七歳半に見し中世是等と前代未だ
と尊好の飯田町名を以て傳ふる事

町人にして学文好し人亦実徳ありし事
主人の養育し志する先日町奉行
是れは鷹取の四角の所志也
此れも又信の盜賊有る頃日と遊
なるといふしゆ也
徒化ありし中及びの風俗改りし
と尊好の事

十二月九日

先生寫山本基庸書



